

に にこにこ笑顔で

い いつもみんなで

っ 紡ぎ繋げる心で

に 日本一をめざすのだ

ジュース 1本の純情！

若かりし頃、学校での勤務を終え自宅への帰途、学校近くのコンビニに立ち寄りしました。買い物後、雑誌コーナーでちょっと立ち読み。週刊誌を読んでいると、そこにちょうどクラスの教え子の女の子が寄ってきました。

「やだー、先生もそんなHな写真見るんですね。」ちょっといたずらっぽい顔をして私の顔をのぞき込んで話しかけてきたのです。ちょうど開いていたページが何と見開きのヌード写真。そこは自他共に認める不良教師。決して動じず慌てませんでした。「学校の先生が週刊誌読んで悪いという法律がどこにあるんだ。オレのようなデタラメな人間になりたくなかったら家に帰ってささと勉強しろ。」悠然と構えて雑誌に目を戻しました。

いやあ、それにしても何たる最悪のタイミング。バツが悪過ぎた、の一言でした。気前のいい性格と自認する私は、その子にジュースをおごってあげました。断っておきますが、これは口止めや袖の下のつもりでは毛頭ありません。

そしてあらためて彼女に一言。「家に帰って早く勉強しろ」

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

さて現実の問題に話を戻します。教師も親も「勉強しろ」。よく安易に口にする言葉です。昔も今も。その昔、ドリフターズの加藤茶も、毎週土曜日に「宿題やれよ」と全国のお茶の間の子どもたちに呼びかけていました。子どもの学力向上を思えばこそその親心とは言え、何とも無責任な常套句です。

「勉強しろ」「宿題をやれ」と連呼しても、子どもが素直に反応しないから困るのです。言っても聞かないから実力行使で手を出すようなことはもちろん御法度です。とにかく今の子どもたちは理屈が先行するのが常ですから、何をするにもきっちり言葉で説明しないと納得しない傾向にあります。

以前、許せない大きな問題行動をした生徒に、「お前なんか豆腐の

角にでも頭ぶつけて死んでしまえ」と冗談で言ったら、「先生、豆腐の角で本当に死ぬるんですか」と真顔で返されたことがあります。今度同じ過ちを重ねたら、本当に豆腐をカチカチに凍らして頭にぶつけてやろうと思うほど、あきれてしまいました。

学力向上のためには、ひとえに「自己教育力」を身に付けさせなければならぬわけですが、結論から言えば、そのためのマニュアルや特効薬などはないのです。その子の性格や個性や能力や発達段階等をよく見極め、手を変え品を変え、褒めながらおだてながら叱りながら檄を飛ばしながら、試行錯誤の繰り返ししかないのだろうと思います。

一言で表現すれば「あの手この手」の総動員。ただし、そのベースとして、子どもとのコミュニケーション、会話と対話を常に大切にしたいものです。

数学の教師をしていて、方程式や関数などを教えていると、必ず毎年何人かの生徒がきまって「こんなこと勉強して、将来何の役に立つんですか？」と口にします。私はきまってこうハツタリをかませていました。

「俺は数学を教えるんじゃないんだ。数学を通して人としての生き方を教えるんだ。つまり、生きていくためのバランス感覚や人間としての器の中身についてだ。詳しく説明すると2時間はかかる。説明してほしいなら放課後残れ。何？部活があるから残りたくない？それなら話は早い。オレの授業を1年間まじめに受けていればその答は必ず見つかる。世の中なんて足し算と引き算くらいできればとりあえず生きていけるだろう。それでいいなら、オレの授業はずっと寝ていても構わない。決して怒らない。今の時点で数学を勉強する必要がないと判断するなら遠慮せずそうしてくれ。」

こう言うと、実際に私に反旗を翻す子は皆無でした。いや、実際放課後残って私に説明を求めてきた生徒が、教員人生でたった一人だけいました。

放課後にその子と向き合いました。中学校の履修教科が9つに分かれている理由や、その中の数学の位置づけ、学習することの意義等々、いろんな事の間答を繰り返し繰り返し、生真面目で頭が固くて理屈っぽい子で、本当に2時間以上も話し続けて疲れ果てました。でも、私も、自分自身が顧問である部活動指導をそっちのけにして、嫌がらずに時間をかけて相手したことで、それ以来その生徒は、私をとことん信頼して接してくれるようになったのです。

「教育」とは、教え育てると書きますが、「共育」の方がふさわしいのではと思います。つまり、「教師」とは、教え導く指導者ではなく、子どもと共に悩み共に考え共に成長し共に生きる「共師」なのでは、と。

教師の醍醐味、教師の生きがい、教師を続けている理由は、何事にも代えがたい、次の3つのかけがえのない喜びがあるからです。それは、子どもたちと喜怒哀楽を共有できる喜び、子どもたちの成長を最も身近に感じることでできる喜び、子どもたちとともに自分もまた成長できる喜び。

私たち教師もそして保護者も地域の大人も、単に年齢が上だということ、人生経験が長いというだけで、教え子や我が子等には、ある意味傲慢不遜な存在に映っているのではないのでしょうか。

当然、威厳とプライドは保ちつつも、子どもの声に丁寧に耳を傾け、同じ目線で子どもに接しながら、上記の3つの喜びを甘受できる謙虚な人間であり続けたいものです。

放課後私と向き合ってくれた、当時中学校1年生だったあの子は、その5年後、大学医学部に進学しました。中学校卒業式当日、「先生のおかげで数学が好きになりました。医者をめざします。なれたら、今度はジュースじゃなくて大好物のオムライスをおごってください」と言って学び舎を後にしたのです。

そう、あの日あの時、コンビニで私に話しかけてきたあの女の子なのです。今では、立派な女医さんとして活躍とのこと。卒業式が間近に迫ったこの季節、コンビニの雑誌コーナーを通ると、あの子のが懐かしく思い出されます。

オムライスの約束はいつ果たせるのでしょうか。